

## 山梨縣護國神社のこと

志村 泰元 陸自65

山梨縣護國神社は甲府駅から約2<sup>キ</sup>北にある。近くに山梨大学（医学部関係以外の全施設）や武田氏館跡の武田神社がある。

西南戦争以来の山梨県関係戦没軍人軍属2万5039柱が祀られている。我が家の一軒おいて隣家の出身で、沖繩で特攻戦死した陸軍大尉が祀られている。「後に続く者を信ず」の若林東一大尉の碑がある。殉職自衛隊員11柱が境内の「山梨宮」に祀られている。

隊友会（会員の多くは三つの組織重複）で清掃奉仕をしている。

自宅から18<sup>キ</sup>、40分。私は4月・10月の例大祭と8月の「みたま祭」には家内とともに服装を正して欠かさず参拝している。

「みたま祭」には各界代表者等が昇殿参拝する。防大空挺を通じての後輩で今は地元出身の衆議院議員である彼も必ず参加する。

蛇足だが彼の玉串奉奠の動作はや

やぎこちない。私は昭和帝より10歳年長だった祖父にこの動作を厳しく教え込まれたのだが、彼の世代の多くは見様見真似のせいだ。

面白いと言っては失礼かも知れないが党派に関わらず、県選出の国会議員のほとんどが参加または何らかのメッセージを寄せる。

例大祭にあわせて殉職自衛隊員の慰霊行事が行われ、ご遺族やOBはこれに参加する。直近の殉職者で50年以上経過しているためか悲壮感はなく淡々かつ厳肅である。

甲府には歩兵第49聯隊があった。徵募区は山梨県全域と神奈川県の一部だった。聯隊は韓国併合後の警備、二・二六事件の鎮圧などに出動。後に満洲へ渡った。やがて南方へ転じレイテ島で壊滅した。

手元に『戦記 甲府連隊』という本がある。父や祖父の世代で顔も名前も知っている人が何人も出て来る。幸いにして生還した人達である。

聯隊戦史詳細は別の機会として、この本に出ている中だけでも多数の人々が祀られているのだとの思いが迫る。現地での武装解除に応じた際、奉焼と見せかけて有志が分割して密かに持ち帰ったという軍旗と竿頭も

神社に所蔵されている。

春の例大祭は4月5日で、境内の桜が素晴らしく、例大祭よりも花見目的の人が多く訪れる。

また蛇足。再就職した会社での最初の春、花見の宴を境内でするからと誘われた。桜がきれいで会社から近い、が理由で毎年のことだとのこと。護國神社がどういう神社である

か説明し、まず参拝して英霊に想いを馳せ「おかげさまで花見ができました」と報告し感謝してからにしよう、と提案した。その年は私が取り仕切って参拝の後、結界の内側の特等席をお借りして盛り上げた。が、翌年から場所が舞鶴城公園に変わった。色々な意味で残念。

例大祭と「みたま祭」にはいわゆる右翼団体の街宣車が10両近く来て駐車スペースを占領する。そうでなくとも駐車場が満杯になるため私は神社から徒歩5分ほどの知人宅の庭へ車を置かせてもらう。

右翼団体の諸君は、正中（参道中央、神様だけの通路）を行進するのはただけだが、概ねきちんと参拝している。神社及び周辺においては騒音も立てない。毎年「みたま祭」の際には境内の一角で冷たい麦茶の

サービスもしている。戦闘服（？）の着こなしや髪処理はイマイチだが嫌な感じや圧迫感はない。

「みたま祭」にはマスコミ数社が取材に来る。ほとんどが手水を使わず、正中を平気で歩き、境内にもかかわらず走り、服装は「オーバー・カジュアル」、祈る人の顔の正面附近でカメラを回し、時に

何かの画面を作りたいらしく拝殿前にいる参拝者に「どけ」と言い、およそ境内での立ち居振る舞いとは思えないが、これは措く。

服装を整えた夫婦で参拝するせいかほぼ必ず取材申し込みをされる。何年前かに1回だけ応じた。20代と思われる女性記者だった。

護國神社がどういう神社か、今日（8月15日）がどういう日か、少なくとも服装を正して参拝に来ている人がどういふ人か、皆目解かっている。聯隊のことや、戦史などに至ってはチンプンカンプンで制度、用語

地名、歴史的背景から数字まで悉く説明を要した。ここへ来ていながら「レイテ島ってどこにあるんですか」など、例えば下品だが「園児に猥談」のようなもので話にならない。だんだんハラが立ってきた。質問には嘸

んで含めるように答えたが、最後に言ってやった。

「私達からの取材については忘れてよ。別の人から取材してデスクへ上げろ。野球を知らずして野球選手にインタビューは出来ない筈だ。それなりの勉強をする必要性を自分で質問しながら感じただろう。それが今日我々を相手にした貴女の成果と思え」

昨年（令和3年）も武漢ウィルス騒ぎ下ではあったが「みたま祭」が行われ、マスコミも来た。取材申し入れがあったが家内ともども手で「×印」を示して断わった。休憩天幕の中でインタビューしているのが聞こえた。相変わらずの何とも奇妙なイライラさせるようなやり取りだった。「インタビューは格闘」と言われる通り、テーマに関する両者の力が拮抗していなければ成立しないのである。

幸いなことに、英霊に申し訳ないことに、身内に戦没者はない。山梨へ帰って来て20年以上。毎年何回か護國神社へ行くせいか、神職の皆さんにも姓で呼んでもらえるようになった。有難いことである。